

R.シュトラウスの室内楽

ドイツの後期ロマン派を代表する作曲家、R.シュトラウス(1864-1949)と言えば、交響詩やオペラが有名で、室内楽作品の印象は薄い。それらは概ね10代から20代前半での作曲であるが、先人の規範を学び取ろうという意欲に加え、自身がピアノとヴァイオリンも達者だったことから、総じて高い完成度を誇っている。

チェロ・ソナタ

R.シュトラウスは、ホルン奏者である父がチェロも得意だったこともあって、この楽器にも通じていた。友人だったミュンヘンの宮廷管弦楽団の首席チェロ奏者、ウィーハンの協力も得て、ミュンヘン大学時代にチェロ・ソナタを作曲し、ウィーハンにより1883年に初演された。古典の協奏曲を踏襲した「急－緩－急」の3楽章構成で、冒頭から輝かしいピアノの和音、朗々としたチェロの旋律が印象的。フガートを経るなど、それら主題のシンプルにして周到的な展開、力強さに対して中間楽章の静けさなど、ベートーヴェンやブラームスのソナタを思わせるところもあるが、随所に後年のシュトラウスの姿を予感させる鮮やかさや色彩が垣間見える。

ヴァイオリン・ソナタ

R.シュトラウスにとって唯一のヴァイオリン・ソナタ。チェロ・ソナタ初演の4年後、1887年に書かれたが、作曲技法は長足の進歩を遂げている。一段と勇壮で、華麗なピアノの和音による開始と、それに続く柔らかく果てしない歌を奏でるヴァイオリンの流れ、色彩の変化。ヴァイオリンとピアノの対位的なかけ合いや、第2楽章のゆったりした甘美なロマンティシズムなど、あたかも2つの楽器によるオペラのように。本曲も古典的な楽章構成を踏襲しているとはいえ、第2楽章を「即興」、第3楽章を「フィナーレ」として、自由な構造や大胆な和声を取り入れて、演奏者にも高度な技巧を求め、古典から一歩も二歩も逸脱している。作曲家のその後の展開を予感させる1曲と言える。

ピアノ四重奏曲

ハ短調という悲愴感漂う調性をはじめ、出だしの重厚さ、楽章構成もブラームスの室内楽を思わせ、ブラームスのピアノ四重奏曲が一つ増えたかのような錯覚を覚える。とはいえ、煌めくようなピアノ、和声の扱い、時折出現するオペラ・アリアのようなのびやかな旋律(《ばらの騎士》や《ナクソス島のアリアドネ》を想起させる!)には、シュトラウスの個性が刻印されている。スケルツォ楽章は、軽さと激しさが交替しながらキビキビと進み、最後は「ティル・オイレンシュピーゲル」風に終わる。月夜をゆったりと歩むような雰囲気たっぷりのアンダンテ楽章を経て、フィナーレではピアノと弦が丁々発止とかけあうなど、実に多彩な音楽となっている。